

2023年9月の総評：木下龍也

秋が好き残りライフは1なのに／音無早矢

人間の「残りライフ」は全員「1」で、時間は止りも戻りもしないから、意識せずともその「1」を常に消費していることになる。時間が進む限り、必ず死ぬ。平均寿命が81歳や87歳であることを考えると、時間が進めば進むほど、死に近づく。「なのに」、「秋が好き」だから早く「秋」になるといいなと思う。夏から「秋」になるのも、冬から「秋」になるのも、それらの「秋」があるのは、現在から時間が進んだ先だ。「秋」に限定しなくても、多くの人は暑い季節には早く涼しくなればいいなと思い、寒い季節には早く暖かくなるといいなと思うだろう。その涼しさや暖かさがあるのも、現在から時間が進んだ先だ。死に近づいているわけである。けれど、死にたいわけではない。未来に進むことと死に近づくことが両立しているだけだ。主体にはそれが見えている、だから「なのに」と書ける。鋭い。

どんぐりの

形に宿る

あったかさ／たんころぶ

いま手元にはない「どんぐり」を思い浮かべてみると、確かに「あったかさ」を感じる。あたたかさ、ではなく「あったかさ」。書き言葉ではなく話し言葉というか、そのぬくもりについては、親しみを込めて「あったかさ」と言いたくなる。幼少期、ひたすらに拾い集めて、宝物のように大事にしていたからだろうか。けれど、「形に宿る」とあるから、もしかしたらこの句に描かれているのは、どんぐり単体についての話ではなく、子どもが大人へ「どんぐり」を手渡しているシーンかもしれない。大切に握りしめた「どんぐり」には、子どもの体温が「宿る」。受け取った大人は「どんぐりの形に宿る」体温の「あったかさ」を感じている。いずれにせよ、記憶のなかの子どもだった自分から、目の前の愛おしい子どもから、大切な「どんぐり」を手渡されているような「あったかさ」がこの句にはある。

タカ君と命名される冷奴／太代祐一

光森裕樹さんの歌集『鈴を産むひばり』に“アンナ＝シュバルツバルト、人ではないものに其のやうな名を付けては不可ない”という短歌がある。“人でないもの”とは、人間以外のすべて、“其のやうな名”とは、人間のような名前ということだろう

う。そうだよな、と思いつつ、ペットの存在が頭に浮かぶ。太郎という名前を付けられた犬や猫もいるよな、と思う。ペットはある程度の長い時間を共に過ごすつもりで飼う。そういう存在に人間のような名前が与えられているのは違和感がない。人形もそうだ。リカちゃんと聞くと、人の顔よりもあの人形の顔が先に浮かぶ。さて、「冷奴」はどうだろう。しかも「タカ君」だ。「冷奴」はある程度の長い時間を共に過ごすつもりで注文したり、つくったりしない。「冷奴」は食べ物だが、「タカ君」は食べ物ではない。「タカ君」です、と「冷奴」を差し出されたら食べるのをためらう。とうふ君とかやっこちゃんならわかるが、「冷奴」と「タカ君」は距離があるというか次元が違う。その両者が他者の「命名」という行為によってパッと結びつけられた瞬間を切り取った句。「冷奴」もきっと驚いたはずだ。

用済みのあじさいを甘やかす路地／松下誠一

「用済み」とは見頃を終えたということで、「甘やかす」とは見頃を終えたにもかかわらず、まだその「あじさい」をそこにいさせているということだろう。「あじさい」自身には見頃などなく、見る者がいなくても、ただ咲いて枯れるだけだ。もちろん「路地」に感情はなく、干渉も鼻屑もしない。「用済み」と捉えているのも「甘やか」していると捉えているのも主体であるが、主体の目を通すことで、読者にもそう見せる力が、ただの薬というよりは劇薬のような力が、この句にはある。

「用済み」という強い言葉を使っているのは、見頃などと勝手に決めている人間の傲慢さを暴き出すためだろう。これまでに何度か見た、そして、これからも何度か目にするであろう、枯れた「あじさい」のある「路地」が、「用済みのあじさいを甘やかす路地」に変わる。読む前と読んだ後の世界が変わる句だ。素晴らしい。

売春の春とか梅毒の梅とか

時々季語を無駄使いして／源楓香

「売春」とは対価を得る目的で性交をすることであり、違法行為である。「梅毒」は主に性行為によって「梅毒」トレポネーマが粘膜に感染することで引き起こされる病気であり、社会問題にもなっている。また、「売春」の「春」は情愛の比喻で、「梅毒」の「梅」は症状として見られる赤い発疹が楊梅に似ていることに由来する。という内容を一旦忘れて、字面だけを見ると、「売春」も「梅毒」も、それぞれの内容を指しているとはなかなか思えそうにない。ならば、法律で禁じられている行為や、防ぎたい病気に使うのは「無駄遣い」、勿体無い、ということである。「春」も「梅」も特定の季節を表す綺麗な言葉だからだ。確かに、という納得感がある。禁じたいのであれば、防ぎたいのであれば、もっと恐ろしい名前にする方がいい。

言葉に敏感であればあるほど、想像力が豊かであればあるほど、「売春」の「春」や「梅毒」の「梅」にさえ一瞬、美しい花を思い浮かべてしまうのだから。

八月の日差しに焼かれて無い方の 腕のカーブは子をいただくため／マズルカ

結句の「ため」を目的と読むか理由と読むか、初読では迷ってしまったので検討してみたいと思う。目的で読むのであれば「子をいただく」という目的の「ため」に「焼かれて無い」、「焼かれ」「無い」ようにした、ということである。これはやや不自然な配慮である。「いただく」ときに「子」に接する「腕」の内側の「カーブ」が日焼けをしていたとしても何ら問題はないはずだからだ。理由で読むと「子をいだい」ているという理由で、「子」に接している「腕」の内側の「カーブ」は「焼かれて無い」となる。この方がすんなり受け取れる。「腕の」外側の「カーブは」「焼かれて」いるが、内側の「カーブは」「焼かれて無い」。その日焼けの有無によって、「子をいだい」ている時間というものが可視化された。実際に経験しなければ、なかなか書けそうにない素晴らしい一首だ。

ぬれている市役所の建物のように 限界なのよなんとなく、こう、／真島しましま

満タンのコップの水が表面張力でギリギリ溢れるのを耐えている「ように限界」であれば、どういうふうに「限界」なのか伝わりやすいし伝えやすいはずなのだが、「ぬれている市役所の建物のように」では、どういうふうに「限界」なのか伝わりにくいし伝えにくい。主体自身も「限界」の比喻として「ぬれている市役所の建物」よりも適切なものがあるのはわかっているはずだが、主体があえてそれを選んでるのは、そうとしか表現しようがなく、そう表現せざるを得ないからだろう。だからそれを誰かに伝えようとする「なんとなく、こう、」と口ごもってしまう。何かに例えてわかりやすく伝えたい、けれどその比喻によってもっと伝わりづらくなってしまふ、でもこの比喻しか適切に主体の胸の内にある「限界」を表現することができない。そのときのどうしようもない苦しさが「なんとなく、こう、」伝わってくる歌だ。

あの夏のカメラロールはやけに青 本気の自由形はきたない／汐見りら

「カメラロール」をさかのぼると、「あの夏」のゾーンが「やけに青」い。「青」は海やプールの色だろう。この「夏」のことは書かれていないし、「あの夏」がどのくらい過去なのかは書かれていないが、「やけに」ということは、「あの夏」ほど海やプールで写真を撮ったことはないということが示唆されている。そういう時期が終わったのかもしれないし、（自撮りではないだろうから）被写体となる相手がいなくなったのかもしれない。その写真を眺めながら思い出したのが「本気の自由形」だ。「自由形」は名前の通り、好きな泳ぎ方ができる競技なのだが、テレビで放映される「自由形」は全員クロールである。それが一番速いから、らしい。けれどもし、選手でもない人が「本気」で「自由」に泳ぐなら、しかもそれが競うものでもないのなら、クロールでも平泳ぎでも背泳ぎでもバタフライでもなく、ただ闇雲に手足を動かす泳ぎ方になるはずだ。だから「本気の自由形はきたない」には説得力がある。「きたない」と書いてあるが、嫌悪感を露わにしているわけではなく、微笑ましく思い出しているのだろう。ああ、遠いな、とか、戻れないな、とかそういうふうに、切なく。

右耳を背中につける

しん しん と

降って重なる粉雪の音／羽水繭

「耳」を当てて心音を聴かせてもらえるということは親しい間柄なのだろう。胸ではなく「背中」だ。相手の目の届かない部位からそれを聴かせてもらえるのなら、より親密な関係であると読める。「しん しん と」という表記は、相手の心拍が落ち着いていることを表していると同時に、「音」のひとつひとつを確かめるように聞いている表現でもあるのだろう。そして「しんしん」は「雪」が静かに降る様子を表す擬態語だ。「耳」を「つけ」なければ聴こえないほど小さいその音にふさわしいのは、粒の大きなぼたん「雪」ではなく、細かい「粉雪」だ。ゆえに主体の頭のなかには「粉雪」が「降って重なる」。この世で最も降り終わってほしくない「粉雪」であり、鳴りやんでほしくない「音」であるはずだ。光景としても、そこから察することのできる関係性も感情も、全てが美しい。

風のひゅー炎のぼわあ水のじゃー

人にはなにがなにができるの／あお

上句を見る限り、「人」の○○○と答えなければ、「なにがなにが」と問い詰めてくる主体は満足しないだろう。○○○に入るのは擬音語で、しかも拗音を伴ってい

なければならないようだ。「風」は「ひゅー」と吹くことができ、「炎」は「ぼわあ」と燃えることができ、「水」は「じゃー」と流れることができる。どの擬音もそのもの独自の個性を表している。じゃあ人は何だ？ぐでえ、とか、だらあ、は疲れたら「できる」が、それは他の生物でも「できる」。みちっ、と群れたりもできるし、さらっ、と離れたりもできるが、大体の生物がそうだろう。あ、にこっ、じゃないか？笑うのって人間だけだから。平和な答えじゃん、と思ったけど、検索したらカルフォルニア大学の研究チームが笑う動物を65種類も見つけていた。すみません、わかりませんでした。しばらくは「なにがなにができるの」という問いを抱えて生きていきます。

以上です。たくさんのご投稿ありがとうございました。
10月のご投稿も楽しみにしております。

木下龍也